

上御殿遺跡 現地説明会資料

調査主体：滋賀県教育委員会 調査機関：財団法人滋賀県文化財保護協会

2011年10月23日

はじめに

財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会と滋賀県高島土木事務所からの依頼により鴨川広域基幹河川改修事業（青井川）に伴う天神畠遺跡（高島市鴨）と上御殿遺跡（高島市安曇川町三尾里）の発掘調査を平成20年度より実施しています。

どちらの遺跡もこれまでの調査によって、縄文時代から室町時代にかけての様々な遺構や遺物を確認することができ、周辺地域の歴史を示す多くの成果が得られています。

平成23年度は、4月より調査を実施しています。これまでに、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代前期～中期の木棺墓、古墳時代後期の溝、奈良時代頃の倉庫群、平安時代後半の大型掘立柱建物などを確認することができました。

なお、昨年度の調査成果である古墳時代の大壁建物と鎌倉時代の馬具・轡（くつわ）について、今年の5月と7月に成果報告を行っています。

（発表資料は、当協会ホームページ <http://www.shiga-bunkazai.jp/> でご覧いただけます。）

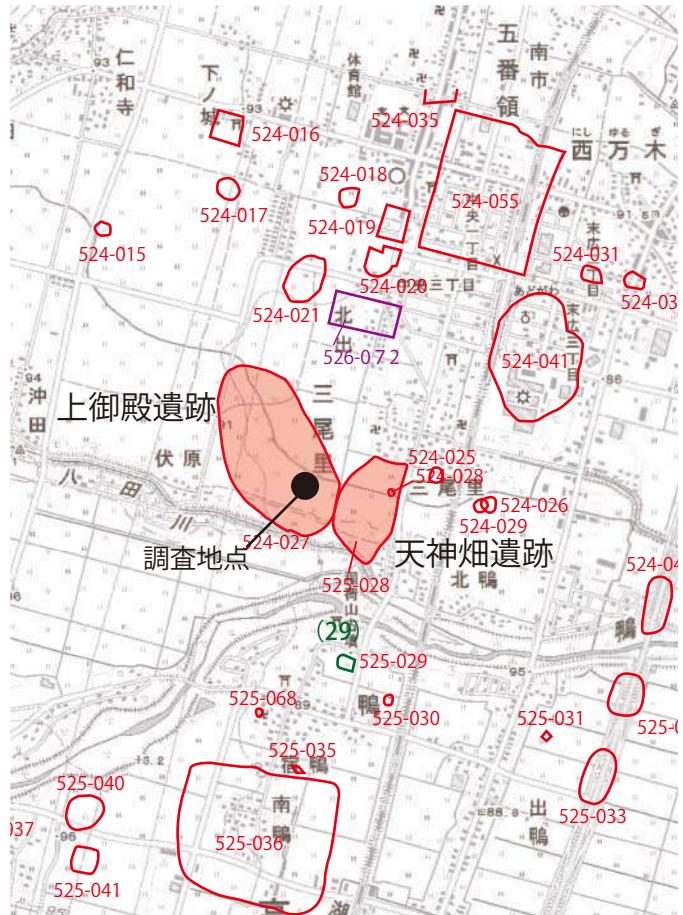


図1 天神畠遺跡・上御殿遺跡 位置図



調査地遠景
(北西方向を望む)

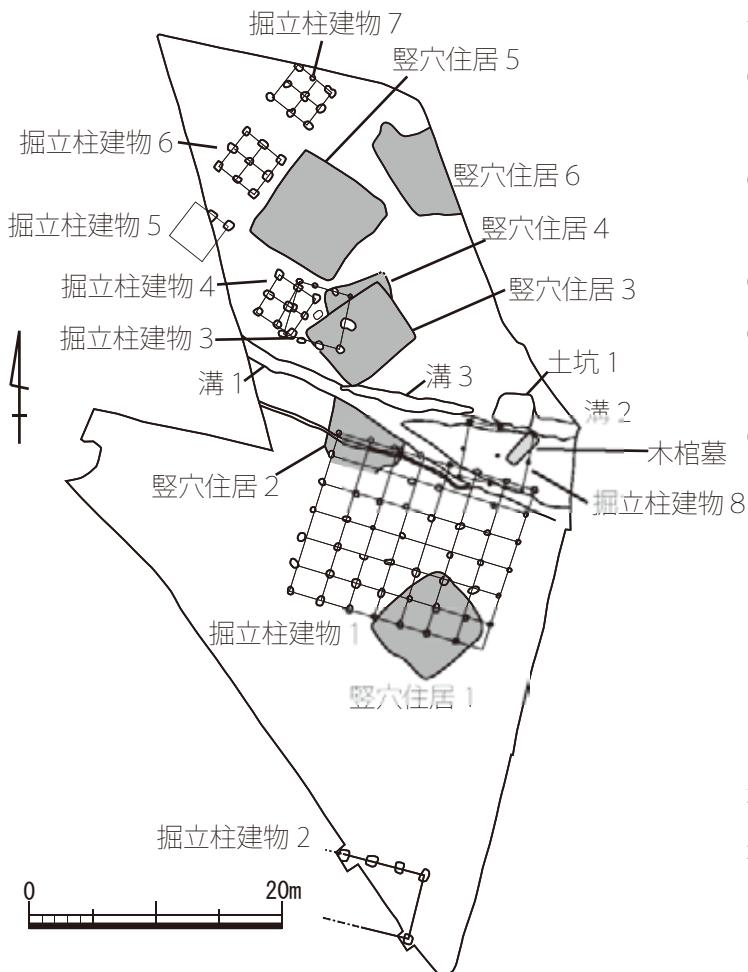


図2 遺構分布図

今年度の調査で確認できた主な遺構

- ①古墳時代前期(約1700年前)の竪穴住居6棟
- ②古墳時代前期～中期(約1700～1600年前)の木棺墓
- ③古墳時代後期(約1500年前)の溝1
- ④奈良時代後半～平安時代初頭(約1200年前)の倉庫群(掘立柱建物4～7)
- ⑤平安時代後期(約1000年前)の掘立柱建物1、溝2・3、土坑1

調査区の南側には、縄文時代から平安時代まで流れていた川の跡が確認されています。

古墳時代前期に竪穴住居の集落が形成されて以降、断続的ではあるものの倉庫群や掘立柱建物といった遺構が見られることから、周辺では集落などを営みやすい場所の一つであったといえます。

年代	時代区分	日本の主な出来事	上御殿遺跡の主な調査成果
B.C.500年 300年 600年 700年 800年 1200年 1300年 1500年 1600年	縄文	約2500年前 稲作始まる。	
	弥生	248年頃 卑弥呼死す。	
	古墳	前方後円墳が各地でさかんに築造される。 繼体天皇即位 鴨稻荷山古墳	古墳時代前期(4世紀) 竪穴住居の集落 古墳時代前期～中期(4～5世紀) 木棺墓 古墳時代後期(6世紀) の溝
	飛鳥	604年 憲法十七条の制定。 645年 大化の革新(乙巳の変)。	
	奈良	667年 近江大津宮へ遷都。 710年 平城京へ遷都。 742年 紫香楽に離宮を造る。	
	平安	794年 平安京へ遷都。 1016年 藤原道長が摂政となる。	奈良時代後半～平安時代初頭 (8世紀後半～9世紀前半) 倉庫群
	鎌倉	1192年 源頼朝が征夷大将軍となる。	平安時代後期(11世紀) 掘立柱建物など
	室町	1336年 足利尊氏が征夷大将軍となる。	
	安土桃山	1576年 織田信長、安土城に移る。 1582年 本能寺の変。 1600年 関ヶ原の戦。	
	江戸	1615年 大坂夏の陣。一国一城令。	

古墳時代前期の竪穴住居



炉
炉の場所は、熱を受け、赤く変色しています。周辺には、炭も散っています。



竪穴住居の復元例

竪穴住居 3(南西から)

古墳時代前期の竪穴住居は、6棟検出することができました。近接したり重複しているものがあることから、住居を建て直しつつ集落を営んでいたことがわかります。いずれも平面が方形で、概ね一辺5~7mの大きさで、一辺約8m(64 m^2 : 約35畳)の竪穴住居5が最大規模のものです。竪穴住居の床面では柱を据えた穴や、煮炊きや暖を取るほか、室内の明かりとなる炉を確認しました。



左：紡錘車出土状況

右：「石山寺縁起」に描かれた糸をつむぐ老婆
(「新版絵巻物による日本常民生活絵引 第三巻」平凡社より転載・加筆)

最大規模の竪穴住居5は、その規模から集落の中でも盟主クラスの住居と考えられます。この住居からは、煮炊きに使用する土師器の甕や食料を盛る高杯などといった土器のほか、石製の紡錘車(ぼうすいしゃ)や鎌とみられる鉄器などが出土しています。紡錘車は糸巻棒のおもりで、これによって糸巻棒を強く回転させることで、糸に撓りをかけてつむぎます。

奈良時代後半～平安時代初頭の倉庫群(掘立柱建物 4～7)



掘立柱建物 6・7(南西から)

2間×2間の掘立柱建物(地面に掘った穴に柱を建てる建物)を4棟検出しました。中央にも柱がある総柱構造であることから、これらの建物は倉庫と考えられます。

いずれも床面積が 12 m^2 内外の小規模なものですが、建物の向きや柱通りをそろえるなど規則的に配置されている状況がうかがえます。

同様の倉庫群が確認されている高島市内の遺跡は、郡衙正倉や郷倉といった公的な性格の遺跡です。上御殿遺跡の性格を考えうえで重要な成果といえます。

古墳時代前期～中期の木棺墓



木棺墓は、墳丘や周溝といった区画施設を持たないお墓で、墓坑に木棺を納めたものです。長方形の墓坑は、長さ 295 cm、幅 102 cmあり、35 cmの深さが残っていました。木棺は残っていませんでしたが痕跡を確認することができ、長さは不明なもの、幅(内法) 63 cm、棺材(長側板)の厚さが 5 cmであることがわかりました。

木棺墓(南西から)



ガラス製小玉出土状況



勾玉・ガラス製小玉

木棺の内部からは、硬玉製勾玉 1 個、ガラス製小玉 82 個が出土しました。墓坑の北端から 1m付近の場所に、まとまって出土したことから、一連の首飾りなどとみられ、被葬者の身につけられていたと考えられます。

ガラス製小玉には、直径 4 mm程度の薄い青色と、直径 2 mm程度の濃い青色のものがあります。出土状況から、薄い青色のものを中央に使用し、その両側に濃い青色のものを使用していたとみられます。